

2022年12月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

ちちははの星に踊の手をかざす
ゆらゆらと潮目に沿うて残る海猫
病む人の葡萄粒さへ手に重し
礼服の他は仕事着豊の秋
故郷がつると飛び出すだちや豆
丹波路や暮れゆく宿のましら酒
盆過や地の野菜積み解出る
秋の夜やバンドネオンとワインの香
竹伐るや父は無心に森へ入る
軒借りて見送る雲や秋時雨
浜松城たる萩庵に萩の雨
宮崎にあり神宮の新生姜
王冠に添ふる秋草誰が摘みし
畝作りふはと一頭秋の蝶
枝豆は素数のリズム団欒す
単線の響く鉄橋天高し
雨期兆すカメルーンなり翺雲
竜田川こさぎ水辺に道の秋

溶岩を覆ひはびこる芒かな
木天蓼の実の虫こぶをまたたび酒
干茸のいよよ縮みて香りたつ
目に見えぬ菌踏みしめ雨の森
怒り消ゆ新米の香のやはらかし
秋日和ひぎに抱ふる二眼レフ
出羽国の棚田一気に水落す
中秋の月や他郷の風呂にゐて
萩叢へ砂吹きだまり漁師小屋
屋根を打つ木の実こつんと夜半の風
香茸のきのこご飯よ奈良田の湯
一人づつ手に取ってみるひよんの笛
鬼の子の風に任せてくるくるり
べくべくと鬼灯鳴らすマスクの子
龍勢の煙火多彩や秋の空
マーラーを聴き終へて聞く虫の声
ゆつくりと鳶の出てゆく秋の海

氷壺集

佐々木成
朝田玲子
河村純子
仁田 浩
谷口文子
森 壹風
鴻坂佳子
片山旭星
牧田満知子
碓氷芳雄
丹羽康夫
宮原亜砂美
西五辻芳子
中井昭雄
富沢壽勇
田中 勝
大石高典
栗本一代

氷室集

福のり子
鳥居裕子
朝田玲子
齋藤亜矢
河村純子
仁田 浩
佐々木成
陶 慧慈
鴻坂佳子
碓氷芳雄
丹羽康夫
竹中一花
森 壹風
西五辻芳子
富沢壽勇
片山旭星
福江ちえり

水害の爪痕深く九月尽
縫れ糸色なき風に解かるる
朝もぎの枝豆茹でて独酌と

宮原亜砂美
谷口文子
田中 勝

2022年11月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

どんと出す布目のしるき冷奴
露草の蕊の濡れつつ巻戻る
曳く鐘の縁も六道参かな
ビーカーに君の指紋や夏期講座
手立てなき廃炉の行方稲光
秋澄むや富士と空なる藍と青
蟬時雨輪廻の端をこぼしつぐ
今日残暑始まる気配夜の明けて
こたびこそ上手く曳きたし迎鐘
杜に透く巫女の鈴の音涼新た
赤富士や未来広きと思ふとき
肩に来てしつかりおしと赤とんぼ
在来種胡瓜ずんぐり送馬
シベリアの苦役の記録敗戦日
乳母車の児の顔にあり秋入日
目力の強き章魚なり睨まるる
月代や隣の屋根の影暗し
夏祭あの子みぬかと探しみる
秋めくやヘルニアといふ傷の跡

仁田 浩
朝田玲子
森 壹風
牧田満知子
鴻坂佳子
田中 勝
河村純子
片山旭星
谷口文子
佐々木成
宮原亜砂美
中島冬子
丹羽康夫
中井昭雄
富沢壽勇
大石高典
碓氷芳雄
福地義雄
川上和昭

氷室集

棚経や香炉の灰のなごり熱
睨み合ふ恐竜の骨夏休
夏安居や無音の中の砂時計
太陽の塔の裏貌稲光
墓詣太古の海はいま町に
星飛んで涙脆しと想ひけり
出す当てのなき文綴り秋の蟬
嚙むほどに背越の鮎の香りたつ
みんなの鳴くや浪曲唸り節
落蟬の鉄色の眼の輝けり
回教の国に及べり秋出水
残暑なか土鍋干したる伊賀の窯

朝田玲子
仁田 浩
河村純子
齋藤亜矢
大辻 都
川内一浩
森 壹風
鳥居裕子
福のり子
福江ちえり
富沢壽勇
谷口文子

蒲の穂を抜けゆく蝶のゆるやかに	鴻坂佳子
肩口の風に目覚めり秋立つ日	小堀尚美
漆黒の潮目に落つる夕焼かな	宮原亜砂美
超の付く連発花火雲動く	大石高典
信濃路の蕎麦屋や横の蕎麦の花	丹羽康夫
天の怒り如何ばかりかやこの雷雨	石原ゆき子
溶岩の転がる湖畔盆の月	田中 勝
五条坂斜めに六道参かな	竹中一花

2022年10月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

ことさらに茂る更地の明治草	仁田 浩
虫送り闇迫りくる空のいろ	富沢壽勇
風蘭の咲くや梅の木五十年	中島冬子
けふ何人の敵かや夫の冷奴	朝田玲子
端居して兜太句集の続き読む	中井昭雄
水槽に跳ぬる魚をり熱帯夜	森 壹風
夏雲やビルの底ひは江戸の坂	河村純子
かそけさや祇園囃子の闇に落ち	牧田満知子
雲の峰鳥海山を越えて立つ	佐々木成
通り雨過ぎ短夜の始まりぬ	片山旭星
星座表買って晴待つ星祭	西五辻芳子
還暦の夜やほろ苦くビール酌む	碓氷芳雄
抱かれたる嬰しばたたく滝の前	鴻坂佳子
遺伝子の多様性減り田水沸く	丹羽康夫
鰻の日つの字の列のどん尻に	谷口文子
夕風と看板猫とレモネード	田中 勝
謎多き深泥池の蓐かな	大石高典
一陣の風雨連れ来て虹となり	石原ゆき子
北の地の丘へ刺すごとと驟雨来る	宮原亜砂美
	氷室集
炎天へ祓ひの矢飛ぶ開所式	富沢壽勇
どの道を行けど島なり蟬時雨	河村純子
はんぎきの調査容器へ逆らはず	仁田 浩
夏の雲湧きだす比叡東山	片山旭星
夏川や餌を追ふ亀の手足疾き	朝田玲子
草刈るやラッパ飲みなる菓罐水	福のり子
鉾立の声の掛合ひ「よつとせい」	中井昭雄

君を知る人と出逢ひぬ蟬しぐれ
猫の見る猫を見てゐる夏の午後
父いつも不味いと一気生ビール
貴船とて川床なればすき焼も
作事方は伏見大工や鉦動く
医書繰れば恋の葉や鷗外忌
鉦立の縄目は蝶よ縄絡み
ピーマンの空つぽ何か詰めておく
秋鯖を頬ばりて子のしたり顔
悠然と雲と泰山木の花
明六つの鐘響き合ふ大青田
大夕焼ひとりふたりと集まり来
欄干をベンチ代はりに橋涼み

川内一浩
齋藤亜矢
田中 勝
鳥居裕子
竹中一花
牧田満知子
細見昌代
谷口文子
山本京子
西五辻芳子
福江ちえり
浅利美鈴
大石高典

2022年9月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

葬列行く持越峠桐の花
古本の手跡角張り青葉木菟
短夜やギター爪弾く反戦歌
暗闇を社に戻る神輿かな
鳥海山据ゑ一郷の青田波
透けて見ゆ守宮の腹に卵三つ
白靴や琴引浜の砂鳴らし
ひとけなき都心の夜や七変化
間の合はぬ鼓の音いろ戻り梅雨
床本と前に太夫の夏袴
尼寺を閑居の御所にほととぎす
昨夜にては昨日の重さよ麦焼酎
試験所に育種幾年日焼して
芸術平和学の講義に原爆忌
生きてゐる証しと届くさくらんぼ
伸びやかに呼吸してみる青田風
雷鳥に魅入るや雲の霧ヶ峰
向日葵のおほかた健康優良児
光の輪六つ浮かべて水馬

仁田 浩
朝田玲子
碓氷芳雄
中井昭雄
佐々木成
中島冬子
森 壹風
富沢壽勇
河村純子
丹羽康夫
片山旭星
牧田満知子
鴻坂佳子
田中 勝
谷口文子
宮原亜砂美
西五辻芳子
前田鈴子
石原ゆき子

氷室集

山道の衛兵のごと今年竹
籠居は次の雨まで蝸牛

朝田玲子
仁田 浩

黒南風やビルに昼の灯並びたり
空催ひ気になる楽屋薪能
賛美歌の丘に弔ひ雲の峰
田植了へ若妻達の弥勒講
戦への想ひそれぞれ雲の峰
石段を棲家としたる蜥蜴の子
白鷺の抜き差す足の黒ぐろと
サーフィンやモーゼのごとく海を割く
水滴を窓に残して皐月富士
三省堂本店鎖せるみどりの夜
葎切のこゑを離るる手漕舟
提灯花野辺の送りを野辺に見ず
枇杷食うて庭に種埋め幼き児
トマト狙ふ鮠といたちごつこなり
溪谷や若鮎跳ぬる茶屋の跡
砂浜の早のにはひ胡粉播る
対面の授業復活アマリリス
お喋りの続きは明日アマリリス

碓氷芳雄
河村純子
川内一浩
佐々木成
片山旭星
谷口文子
森 壹風
牧田満知子
丹羽康夫
中村順次
竹中一花
森 幸子
小堀尚美
前田鈴子
森川恵美子
西五辻芳子
富沢壽勇
宮原亜砂美

2022年8月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

夏きざす木を態と為し仁王尊
豆植うや豆飯用を三粒ほど
この中の幾つ実となる柿の花
川魚の鱗のひらりと夏兆す
駆けぬくる少年の香よ更衣
昼時の村の静けさ柿の花
青嵐吹きゆく先の大伽藍
湯上りの髪そのままに夏の月
大潮の礁をかすめ岩つばめ
モンゴルの茶や羊乳と麦こがし
はんざきの川下り来て爆心地
駅舎より高きあふちの花の空
真鶴湾「お林」が糧夏の海
ベランダのもの薬味とし初鯉
よろづ屋に団扇の束の並び出す
釣船の常連となり親鴉
水切りの波紋に遊び雲の峰

仁田 浩
小 和
中島冬子
朝田玲子
牧田満知子
佐々木成
中井昭雄
森 壹風
鴻坂佳子
丹羽康夫
田中 勝
西五辻芳子
富沢壽勇
石原ゆき子
谷口文子
大石高典
碓氷芳雄

薫風や並木の影のキッチンカー
青東風や伏し目がちなる道祖神

白服を着て白服の人と会ふ
小満やぽんと栓抜く音のよき
聞き慣れぬ鳥の声して青岬
水芭蕉この期ひぐまの好物と
一樹より一瓶のジャムさくらんぼ
船頭が目打にくねる穴子かな
夏めくや竹皮鞣しばれん編む
筍の瓶詰に精出しにけり
干拓の植田千枚光り合ふ
逆上りに青空近し百千鳥
暮れ残る花桐高き屋敷林
食堂の亭主見守る燕の巣
走り梅雨高く積まれし無縁墓
初夏やふつと寄りたる鳩居堂
岩魚の酒かをりに酔うて箸を置く
麦秋や片手に余す塩にぎり
薫風や声よく通るつづら折
嗅覚の戻り試しの鰻食ふ
風薫る子どもときの朝のごと
風薫る視力よき日の文庫本

片山旭星
立石律子
氷室集
仁田 浩
朝田玲子
川内一浩
浅利美鈴
西五辻芳子
大石高典
牧田満知子
奥野千秋
佐々木成
福のり子
福江ちえり
片山旭星
大野邦夫
谷口文子
鳥居裕子
森 壹風
鴻坂佳子
富沢壽勇
小寫 和
山本京子

2022年7月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

朝まだき遠き比叡の棚霞
蛸の子を近頃は見ず白子干
牧野翁像の佇む庭や春
島煙る紀伊水道の卯月波
風垣を解くや展けし日本海
春愁やマトリョーシカはみな笑顔
薇の綿毛を糸に奥羽なり
春暁や愛宕の山に雲三筋
階段を自転車担ぐ遍路かな
砂いろの貝もぐりこむ潮干狩
草萌や主審墨審入れ替はる

小寫 和
朝田玲子
富沢壽勇
碓氷芳雄
佐々木成
片山旭星
中島冬子
森 壹風
中井昭雄
牧田満知子
仁田 浩

人混みにネクタイ緩め春暑し	田中 勝
須弥壇の天武天皇松の芯	丹羽康夫
リズムよく前に進むよイペの花	宮原亜砂美
深爪に醤油のしみる春夕焼	谷口文子
落人の道ざわざわと竹の秋	西五辻芳子
余白無きフィールドノート西行忌	大石高典
名産に魚醬なるかや島の春	川上和昭
誰かれも強き人なり牡丹の芽	河村純子
	氷室集
高揚の静けき村や鶏合	富沢壽勇
花冷や動物園に鎮魂碑	大石高典
前髪の乱れや風の雪柳	川内一浩
羊の毛刈る少年が銃を持つ	牧田満知子
指先のカナリア色ぞ松の花	朝田玲子
いま土に還るときなり飛花落花	福のり子
橋桁をすり抜け山へ油風	碓氷芳雄
朧夜に吉兆の星カノーパス	仁田 浩
象潟や茂吉遊びし春の浜	佐々木成
上賀茂の神馬目先に虻うなる	河村純子
初蝶の草の高さに飛び来たる	福江ちえり
橘の北限の地や風光る	丹羽康夫
閨門に夏兆す風鳥の風	竹中一花
小刀に削る鉛筆昭和の日	大野邦夫
無骨なる手に炊きあげし稚鮎かな	谷口文子
山荘のあるじ窓辺の花見酒	小 瀧 和
一度いま転んでみたき蓮華の田	山本京子
病む夫と器につくる花筏	前田鈴子
駄々こねる子の泣き止みぬ花吹雪	佐藤 聡
新入生隠し隠せぬ国訛り	佐藤慎一

2022年6月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

母の手に持たす学位記風光る	碓氷芳雄
山荘の棚より父の雲雀笛	朝田玲子
苔庭へ椿赤きが落ちにけり	森 壹風
雪解風荒ぶる丘の多喜二の碑	佐々木成
春耕や神の山とふ急斜面	小 瀧 和

啓蟄や小さき生き物なべて虫	仁田 浩
鴨川に夜の帳来る春時雨	片山旭星
花冷の外堀を行く小舟かな	富沢壽勇
しやりしやりと水菜や明日を疑はず	谷口文子
茶畑の溜池へ登り行く蛙	丹羽康夫
タイルの目地白きが目立ち春時雨	宮原亜砂美
待ちわびし日本蜜蜂二匹来る	西五辻芳子
被爆地の桜に願ふ咲く力	田中 勝
木々芽吹く「カレーの市民」肩越しに	鴻坂佳子
春泥や轍跡なる荷の重み	川上和昭
事多き此岸なりけり彼岸西風	長瀬朋孝
戦禍の子へ祈りとどけよ揚雲雀	中井昭雄
馬の仔の足取りすぐに確かなる	城戸崎雅崇
春の雄滝穿ちて水の奔りけり	牧田満知子
	氷室集
接木して後は天地に任せおく	仁田 浩
花馬酔木香るゆふべや旅装解く	朝田玲子
山腹を上へ上へと桜狩	碓氷芳雄
膝上に手熨斗しつつよ初音聴く	西五辻芳子
竹麦魚の鰹の歯応へ声に出て	大石高典
ものの芽に水の冷たさありにけり	福江ちえり
百年の重き藁屋根春の夢	山本京子
暁の沼蹴り白鳥帰り行く	佐々木成
星は去り春あけぼのの禽の声	津嘉山典
さざ波や近江の湖の春霞	片山旭星
菜種梅雨なほ断層のそばに住み	谷口文子
空も海も犬も映して石鱈玉	富沢壽勇
菜の花や富士火山帯すぐそこに	丹羽康夫
海上はるか淡路島霞けり	小 瀧 和
かく小さき水輪残しし初蛙	牧田満知子
満行の修二会壇供をぜんざいに	細見昌代
春風や鈴鳴らし行く修行僧	佐藤 聡
ガイド役の手の石図鑑春の川	森川恵美子
たんぽぽの堤へ母の車椅子	大野邦夫
ふくらませ紙風船を妹に	中井昭雄

2022年5月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

冬林檎ぱりぱりと喰ひ妊馬なり	朝田玲子
野兔の足跡しかと社まで	佐々木成
旧正や教へ子はいま兵役に	小 瀧 和
深更や庭につがひの春の鹿	碓氷芳雄
寒満月凄みの失せて朝の空	鴻坂佳子
封印の方言は古語春近し	仁田 浩
日照雨来る八坂の塔や春の虹	中井昭雄
花衣誰に見するにあらねども	西五辻芳子
幕屋よりままごとの声うらけし	富沢壽勇
たひらなる風が麓へ山笑ふ	森 壹風
星雲のごとき蠟梅夕暮れて	大石高典
淡雪の中へ叡山線の消ゆ	片山旭星
うららかや宇宙飛行士募集中	石原ゆき子
春立つやいつもの位置に猫のをり	河村純子
太宰府におくれじと梅一花かな	川上和昭
海舟と鉄舟が碑や実割梅	丹羽康夫
薪割るや重なる山の春浅し	牧田満知子
北国のごとく窓打つ雪乱れ	立石律子
背中より土埃あび耕しぬ	宮原亜砂美
	氷室集
荒東風や駆歩の速度を抑へかね	朝田玲子
両隣へだてて高き雪の壁	佐々木成
旧正や佛跳牆のスープの香	陶 慧慈
部活動帰りの寒さコロッケ屋	鳥居裕子
笹鳴へ上手くなれよと聴き入りぬ	谷口文子
退く気力今のうちなり落椿	中井昭雄
木の実植うをさなの呉れし宝なり	西五辻芳子
四条烏丸西も東も山笑ふ	小 瀧 和
球根が雑誌の付録ヒヤシンス	仁田 浩
猫車押し来る斑雪の畑	福江ちえり
春浅しロバの背に負ふ塩袋	牧田満知子
維管束見るにオランダキジカクシイネ	丹羽康夫
滝凍つや声よく通る脇の茶屋	鴻坂佳子
風花舞ふ京都盆地の底にをり	河村純子
春光に富士の輝き茶を喫す	田中 勝
苔まとふ古木に白き梅の花	片山旭星
東山つつむ霞や野の仏	竹中一花
流し雛重き祈りを背に負うて	山本京子
梅咲くと気のやはらぎに水走る	宮原亜砂美

ダム底にありし暮しや冴返る

大野邦夫

2022年4月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

凍る夜や五右衛門風呂の板傾げ
囃子唄うろ覚えなり薺打つ
代る代る笛吹きつなぎ初神楽
鼻の目玉動くも首見えず
独り居は雪積む音の聞こえさう
賑はひに隣る母校ぞ宵えべす
高々と杜に声張る初鴉
パルチザンたりしと老女毛糸編む
酒田より三本届き寒造
舞初や袴の紐をきつく締め
御仏も龍も出でにし焚火の穂
火山島いよよ大きく冬の海
紙めくる音火花めく大試験
寒柝や聞き覚えある声近し
無為のごと竹輪麩の浮く関東煮
雲間よりオリオン冴ゆる渡月橋
座布団干す蕎麦屋ありけり春隣
楫や鳥の運んでくれし種子
雪道や最短距離を獣道

順番の太鼓待つ子や初神楽
年玉や子に還りみる母にこそ
少年の眼鏡し騎馬始
渾淡くどんどは闇に戻りけり
荒土の凍る大地の深さかな
大海を跳ぬる形に鱈届く
留学生祖国を祈る聖夜ミサ
残雪の雨の形に尖りけり
焼畑のくの字の大根引つこ抜く
森の使者たるを頂く紅葉鍋
をけら火の縄の消し跡地下鉄へ
阿弥陀籤めく枯枝先へ先へ

碓氷芳雄
朝田玲子
小畷 和
中井昭雄
仁田 浩
中島冬子
佐々木成
鴻坂佳子
丹羽康夫
河村純子
森 壹風
西五辻芳子
大石高典
谷口文子
富沢壽勇
片山旭星
石原ゆき子
川上和昭
野木正博

氷室集

小畷 和
森 壹風
朝田玲子
仁田 浩
陶 慧慈
福江ちえり
佐々木成
小堀尚美
大石高典
浅利美鈴
宮原亜砂美
福のり子

薪割るる音の爆ぜたる焚火かな
寒鰯や賑はひ戻る輪島港
荒巻の鱗飛びちる夕べかな
生かされて阪神淡路震災忌
閉店の貼紙濡らす曇かな
晴天へ居坐るかまへ雪だるま
合言葉めく老いのこと寒見舞
寒禽は寂しからずや夕餉の香

佐藤 聡
中井昭雄
富沢壽勇
西五辻芳子
谷口文子
河村純子
山本京子
牧田満知子

2022年03月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

日捲りのもぎとりの瘡十二月
隣席の商談果てず冬の雨
初雪の融けぬ比叡へ月昇る
寒柝や揃はぬ声の曲り角
枯蓮や支へ合ひつつ向き向きに
母仕立てし綿入の藍まだ匂ふ
穴十三の練炭熾す毬の嵩
風呂敷の角をしつかと寅彦忌
水潤るや栲原越ゆる脱藩路
玻璃戸背に生徒の並ぶ日向ぼこ
天浜線上り待つ間の焚火の香
木の実落つ人工林の防潮堤
乾布摩擦欠かさざる祖母冬の朝
手毬唄あより始めて臍たけて
飛び立てば冬ざれの街はや暮るる
陽と土の匂ふ厚司や父の膝
振売の賀茂の野菜や初時雨
朝日いま永観堂の散りもみぢ
吉右衛門逝き冬菊の香り立つ

仁田 浩
朝田玲子
片山旭星
小寫 和
中井昭雄
佐々木成
中島冬子
河村純子
田中 勝
富沢壽勇
丹羽康夫
川上和昭
大石高典
西五辻芳子
牧田満知子
前田鈴子
石原ゆき子
野木正博
鴻坂佳子

氷室集

網元の土間に大きな囲炉裏かな
初日待つ無言の男子高校生
切株の年輪数へ冬至かな
皮食うて舌滑らかに鮫鱈鍋
餅焼くや五徳とはさてなんだらう
暦果つ子の落書をまた吊るし

佐々木成
小寫 和
森 壹風
朝田玲子
仁田 浩
鳥居裕子

丹田にえいと気合の冬の朝	河村純子
玉子酒飲み干してより迎へ酒	浅利美鈴
カステラのざらめざらつと冬に入る	谷口文子
大皿の湯気に冬至の餃子かな	陶 慧慈
水潤るるあたり往時の通学路	碓氷芳雄
獅子舞は祖父なりされど恐しき	山本京子
手枕の長々ひとり虫の闇	福のり子
初雪や朝日の照らす東山	片山旭星
残業の頬のほてりや枯木星	鴻坂佳子
列島の大きな溝や寅彦忌	富沢壽勇
えべつさんマスクしなはれ初戎	西五辻芳子
抱く子の小さき嚏や電車待つ	佐藤慎一
煮凝や鯛三匹煮付たり	野木正博
命消えゆくを守りて冬の虹	宮原亜砂美

2022年02月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

オリオンを追ふか加速の尾翼灯	小島 和
地下足袋を風の煽るよ松手入	朝田玲子
心拍のひとつ飛びたり冬隣	仁田 浩
鹿寄せやベートーベンのホルンの音	西五辻芳子
一茶忌の猫や子供や丸くなる	河村純子
渡し場の名残の杭や赤とんぼ	佐々木成
片時雨宇治橋渡り切らぬうち	鴻坂佳子
ぶぶ漬や京の町家の隙間風	森 壹風
決断の時やも知れず冬の薔薇	富沢壽勇
幾度ぞ鮫鱈吊りし釘の錆	中井昭雄
糸杉に絡みし霧の重さかな	牧田満知子
踏張つてふんばつて子ら大根抜く	中島冬子
山腹を抜くる鉄路よ冬夕焼	碓氷芳雄
星月夜姨捨山を通り過ぎ	丹羽康夫
薬草の薫香放ち山眠る	田中 勝
掘り起す土の匂ひや冬ぬくし	宮原亜砂美
遠景の空の真青や時雨来る	片山旭星
窓側いつも妻の席なり初紅葉	河上和昭
石蹴りの石探しみる冬の川	谷口文子
	氷室集

秋ともしブリキの凹み戻る音
立冬や蓄へし髭剃り捨てて
松手入せし夜あをき香立ち上がり
北山に虹を架けたる時雨かな
ほどくよりまづ見通して枯葎
やつでの葉振り走る子よ小春空
初霜や千木のきはだつ伊勢の宮
地下足袋のかるき砂利音敷松葉
謎秘むる環状列石雁渡る
大豆引く根粒菌の土のこと
空と海分かつ水平線師走
銀杏や古代の星に触れてみる
牡蠣小屋の案内状に磯の香も
縁側の急須に湯気の小春空
十一月はたと寝所の模様替
うそ寒や音声案内鳴り通し
落葉掃き一日二度の京町家
月食の終はるまで待つとろろ汁
一生を働き盛り熊手買ふ
山茶花の透けたるとき白さかな

仁田 浩
森 壹風
朝田玲子
片山旭星
富沢壽勇
鳥居裕子
田辺美千代
鴻坂佳子
佐々木成
丹羽康夫
小 和
河村純子
田中 勝
碓氷芳雄
山本京子
福江ちえり
石原ゆき子
森川恵美子
中村順次
谷口文子

2022年1月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

真空管アンプ遺さう曼珠沙華
栗焼くや景福宮の大通り
菱の実買ふ紙袋より角出して
秋晴や金百円の山羊の餌
黄落や海へ急坂まるび落つ
柿ひとつ空の遠きを確認する
秋澄むや龍笛響く阿弥陀堂
先生に会ひたし木の実踏みてゆく
火恋し新聞とづる朝ぼらけ
長き夜のゆつくり揺るる地震かな
眠り落つ木地師の村の星月夜
具象より抽象となりとろろ汁
蒔絵師の極細の筆柘榴描く
手品師のごと鴉手に案山子立つ
爆心地に大樹と育ち銀杏散る

仁田 浩
富沢壽勇
中島冬子
鈴木春菜
朝田玲子
河村純子
丹羽康夫
小 和
碓氷芳雄
鴻坂佳子
佐々木成
大石高典
中井昭雄
森 壹風
田中 勝

焼くとせむ籠に溢るる森の秋
色づくや池塘に浮かぶ未草
草堂の浅黄斑蝶にまた会うて

山側の席みな埋まり秋の富士
猪垣を張りし野菜のつつましく
朝霧や草踏む靴の重きこと
木通なら皮が美味しと陸奥は
乾杯の泡よグラスよ衣被
小包に故郷の印や柿の秋
朴の実や笙の音渡る羽黒山
まだ青き櫛の実櫛の木に揺れて
十月や干藁の列整然と
オリーブの実は箸休めタジン鍋
渋抜の柿の太きよ郷の味
人間国宝密葬なりし昼の月
銭湯のまたの値上がり秋時雨
柿食へば種とも言へぬ種のあり
居酒屋を出でて夜寒の別れかな
秋風に持て余す時預けおく
行く秋や鋏に残れる父の癖
九年母や電話したきに母は亡く
西へ往く絹の道なり柘榴の実
柿を挽ぐ実りの重さ手に受けて

牧田満知子
野木正博
石原ゆき子
氷室集
朝田玲子
仁田 浩
森 壹風
鳥居裕子
河村純子
碓氷芳雄
佐々木成
小 崑 和
山本京子
富沢壽勇
田中 勝
佐藤慎一
大石高典
谷口文子
片山旭星
石原ゆき子
前田鈴子
小堀恭子
牧田満知子
小堀尚美